



“三方よし”の職場づくり



第9回

小さな連携は縦割り行政を 打開する大きな一歩！

複雑多様化する地域課題を一つのセクションだけで解決しようとするのはナンセンスだ。

私が所属するいこまの魅力創造課は、まちに誇りを持ち、まちの課題解決に向けて自ら行動する“まちの当事者”を増やししながら、生駒市に住んでみたい、住み続けたいと思われるような都市ブランドを確立することをミッションとしている。市全体から見ればごくわずかな予算の課だけが直接事業を実施したところで効果は限定的である。目的を達成するためには、縦割り行政の弊害を打開し、あらゆるセクションが同じ方向を向いて事業を進めなければならない。

ここ数年で進めてきた“ヨコ”の連携で成果が出てきている。全国の自治体のさきがけとも言われる本市の職員採用広報がその一例だ。全国でもトップレベルの受験者数を誇る本市の職員採用は、少数精鋭を目指す生駒市にとって最重要施策である。さらに、若い世代に生駒市への関心をもってもらう絶好のプロモーションの機会である。そのため、毎年、人事課、広報広聴課及び当課の3課連携チームを作り、コンセプト検討からコピー制作、写真撮影まで職員が自前で行っている。私も昨年度のポスター製作を担当した。3か月間にわ

たり、若手中心のチームで定期的集まり、頭を悩ませながらも各々の所属で培ったノウハウを持ち寄り、昼休憩時に庁内の若手を集めたアイデアソンを行ったり、若手連携チームならではの柔軟な動きができた。完成したポスターの評判は上々で、受験者数も前年度を上回る結果となった。

セクションを超えた連携の効果を身をもって体感したことを契機に「ファンづくり12のアイデア」という庁内報の配信を開始した。各セクションの事業に、都市ブランド構築で重要視している“ファンづくり”という視点を入れてもらうための仕掛けだ。そこでは、ポスターデザインのノウハウからまちづくりの考え方まで幅広い内容を取り上げながら、庁内連携を促すメッセージを一貫して発信し続けている。連携をより具体的に進めるための庁内プラットフォーム整備も検討中だ。

大きな事業でいきなりセクションを超えた連携をしようとしても心理的なハードルが高い。まずは小さな連携によってコツコツと実績を積み上げ、少しずつでも庁内連携を経験する職員を増やすこと、連携の効果を実感するセクションを増やすことが柔軟な組織づくりにつながる。

(奈良県生駒市いこまの魅力創造課／上野貴之)

※本コラムは「自治体改善マネジメント研究会」のメンバーがリレー形式で執筆します。